藤村『破戒』の舞台を飯山に導いた
藤井宣正と「椰子の葉陰」

新井　宏

藤井宣正……。おそらく、どこかで名前を見かけたとお思いだろう。

そうなのである。同人村上邦治氏の連載「安芸門徒シルクロード紀行」に登場する準主人公格の人物名なのである。

準主人公格とは言っても、通算二五〇頁ほどになる長編のなかで、フルネームの藤井宣正が出てくるのが七頁、藤井または宣正の名前が出て来るのが二〇頁に過ぎない。したがって、あまり印象に残らなかったかも知れない。

ところが私の場合、なぜか藤井宣正が初出した「安芸門徒シルクロード紀行(2)」の部分を読んでいて、訳もなく懐かしさがこみ上げてきたのである。短い文章なのでそのまま引用する。

……インド班には薗田宗忠（文学寮教授アメリカ留学中ロンドンに召集）、島地大等（黙雷の養子大学林卒）ら八名が選ばれ追加された。最年長で班長格の藤井宣正（一八五九生）は西本願寺内地留学生とし初の東京帝大哲学科を卒業直ぐに文学寮教授に迎えられ、次年には教頭になった。急遽一九〇〇年末ロンドンに留学生として光瑞のもとに呼び寄せられた。能力・人格いずれも光瑞の信頼する人物であり、かれの著作からすでに海外でも仏教学者として知られていた本願寺派有数の学者であった。

かつて私がシルクロードやチベット、インドに夢中になっていた頃の印象であろうか。しかし手元の参考書やコピー集を見ても手応えがない。インターネットで調べて見ても様子が異なる。どうやら私の勘違いだったかも

知れない。

しかし藤井宣正が再び『まんじ』に登場するのはそれから九ヶ月後の「安芸門徒シルクロード紀行(5)」で、その間に私の関心も大分薄れてしまっていた。ところが「紀行(5)」には再び次のような記述が出て来る。

仏陀伽耶では藤井宣正と別れ一足先に呼び寄せられた島地と秋山が合流した。六日遅れた藤井は途中車中で旧知の河口慧海と井上円了に偶然会い、二人を連れて光瑞のもとに赴き引き合わせた。

黄檗宗の河口慧海はネパールからヒマラヤを越えて、鎖国を守るチベットの都ラサに日本人として初めて潜入した。その後チベット学を主導した入蔵者としてその名を遺した。

大谷派で教育家の井上円了は哲学館（後東洋大学）を設立……仏教は科学的見地に反しないと主張、当時の西洋文明＝キリスト教に異議を唱えた。

藤井は一ヶ月前アジャンタで姉崎正治にもすれ違っている。姉崎は帰国後東京帝国大学教授に就任し宗教学講座初代担当教授となり、日本宗教学の基礎を開いた。

やはり藤井宣正は河口慧海の『西蔵旅行記』[1]に登場していたのである。私が五十年近く前に、仮設の相模原図書館で借りて読んだ本は装丁からして戦前の旧版だったが、今はインターネット上の『青空文庫』で簡単に読める。

その第一四三回に、河口慧海がバンキープールという停車場で、インド人と英語で話していたらトイレから藤井宣正が飛び出してきたという話がある。慧海はたまたま井上円了と同行していた。また藤井宣正も大谷光瑞がダルバンガローにいるので会いに行く途中であった。そして、河口慧海(一八六六生)、大谷光瑞(一八七六生)、井上円了(一八五八生)、藤井宣正(一八五九生)、その前後に会う姉崎正治(一八七三生)が偶然インドで大集合したのである。

話題は終始河口慧海が義理のあるチベット人を助けるためにネパールに入国するというのを三師が止める形で進んだが、最も強烈に反対したのが藤井宣正であった。藤井は言う。

大体その道理が分らぬ。婦人の仁というのはその事だ。いわゆる小仁を知って大仁を知らぬ者の言だ。その理屈は君はまだ分らんのだろうからおれが言って聞かせる。元来チベットに起って居る事件は何人位死刑に遇うのか分らんけれども、ここに十名の人なり二十名の人なりが死刑あるいは財産を没収されると仮定したところで、それが世界に対しどれだけの害を及ぼすかそれをよく考えて見なさい。鎖国を励行する一つの動機

になるだけで、そんなに大きな害はありませぬ。しかるに君がこれからネパール国へ入って不幸にして死んだらどうするか。折角出難いチベットから出て来て世界に紹介すべき大功の事を冥土に齎らしたからといって何の益があるか。早く日本に帰ってこれを世界に紹介したならば、間接にどれ位世界の学者に利益を与えるか知れない。だからこの場合は世界に対する義務ということに重きをおいて、チベットに対する小さな義務を棄てにゃあならぬ。しかるにその別も付かずにただ子供のように女のように、区々たる人情に搦まれて居るというのは分らん話だ。

大谷光瑞や井上円了も同意見であったが河口慧海は諦めない。しかしインド皇帝戴冠式に来ていた奥中将や外交関係者も動けなかった。結局、慧海はネパール入りして、ネパール王を通じてチベット法王へ嘆願書を提出するという方法を探った。

それにしても、温和な風貌の藤井宣正にこのような激しさがあったことを改めて知った。そう言えば、後に宣正と結婚する井上瑞枝が「其頃島地家に出入した、腕白連の中の総大将が宣正だった」[2] (p.242) と述べている。その頃とは瑞枝が十一歳で初めて島地家に寄宿した頃、すなわち宣正が二十二歳の頃の話である。

かくして藤井宣正に対して感じた懐かしさは、河口慧海の『西蔵旅行記』の記憶によるものかも知れないと思った。しかし、藤井宣正について知れば知るほど、新たな疑問や好奇心が生まれてくる。ここまで来るともう止まらない。

それを紹介しようというのが本稿の目的であるが、雑然とした項目を羅列しても、すっきりしない。そこで思いついたのが、「藤井宣正の紹介」を兼ねて、「藤井宣正ウィキペディア」の全文を載せ、その項目を選びながら書き進むことである。**「藤井宣正のウィキペディア」**を次に引用する。

一八五九年、越後国三島郡本与板村（現新潟県長岡市与板町本与板）の光西寺に藤井宣界の次男として生まれた。旧制長岡中学を経て慶應義塾に学び、西本願寺からの内地留学生として初めて東京帝大哲学科に学んだ。東大卒業と同時に西本願寺文学寮教授に就任。当時における仏教学のエキスパートとされ、一八九一年には日本で初めての仏教通史となる「佛教小史」を著した［A］。一八九二年に飯山の井上寂英の長女瑞枝と結婚。瑞枝は日本英学校（?）を首席で卒業「心の露」[3]を出版した才媛であり、実家は島崎藤村「破戒」の中で蓮華寺のモデルとなった［B］。ちなみに、この二人の仲を取り持ったのが入江寿美子（後の伊藤博文夫人）である［C］。また、翌年の東京白蓮社会堂

での挙式が日本初の仏前結婚式とされている。

一八九七年に教授を解任（され）、埼玉県第一尋常中学校長に就任した。一九〇〇年、本願寺よりヨーロッパにおける政教調査のためロンドン派遣の命を受け、大英博物館やヴィクトリア&アルバート美術館にて仏教美術研究の最新動向に触れた。一九〇二年～一九〇四年に浄土真宗本願寺派の第二十二世門主大谷光瑞が組織した学術調査隊・大谷探検隊では実質的リーダーを努め、中央アジア・インド・東南アジアへ三度にわたり（宣正は一度だけ）仏教伝播の軌跡を追う調査を行い、特にシルクロード研究に関する調査成果を残し、貴重な遺物・古文書を日本に持ち帰った。その中でも一般にもよく知られるインドのエローラ石窟群やアジャンター石窟を、日本人として初めて本格的に調査した。

二百日以上に及ぶ行程のレポートが日本へ送られた後に紛失してしまったことで、彼らの調査は正当な評価を受けることができなかったが、隊の様子は宣正が記していた「印度霊穴探見日記」[4]などに垣間見ることができる。調査を終えた後、もともと体が弱かった彼は劣悪な環境の中で腸を患いながらも、昼夜を惜しんで同地での研究・調査に打ち込んだ。一旦は小康を得たものの一九〇三年に再度調査の指示があり、ロンドンに渡航する直前、フランスのマルセイユで帰らぬ人となった。享年四十五歳。死後本願寺学位最高の勧学に任ぜられた［D］。

一九〇四年、島崎藤村は「明星」にて宣正の生涯をモデルとした「椰子の葉陰」を発表、旅先で書かれた彼の絵葉書や日記をもとに、未知を求めて異郷の地で孤独な死を迎えた青年僧への哀惜の情が藤村の詩情と重なり、主人公への共感をより一層強めている［E］。後に次女鶴枝は高野辰之と結婚している［F］。

それでは始めよう。

［A］宗教学者、藤井宣正も井上円了も長岡出身

藤井宣正の出身は新潟県長岡市与板町の浄土真宗本願寺派西光寺である。長岡市は私が小学校二年生から五年生までの四年間両親の郷里を頼って疎開していたところであり、与板町についても、千坂精一氏が本誌連載「関東管領始末記」で上杉景勝を支えた智将直江兼続の城下町として紹介しておられたことなどを良く覚えている。

藤井宣正が東京帝大哲学科を卒業して浄土真宗本願寺派の文学寮教授となり、まもなく教頭になったことは村上氏も紹介しているが、文学寮は龍谷大学の前身であり、その教頭は実質的な学長を意味していた。すなわち龍谷大学の実質初代学長は藤井宣正なのであった。

ところで、偶然であろうが、河口慧海の『西蔵旅行記』

[1]にも現れた井上円了も長岡市浦村の浄土真宗大谷派慈光寺の長男で、東京帝大哲学科を卒業して、まもなく東洋大学の前身哲学館を創設している。すなわち東洋大学の初代学長となっている。長岡市浦村は私の疎開先の高山村から信濃川を挟んで三キロメートルのところ、信越線の鉄橋を渡って遊びに行ったこともある。

井上円了が洋学に目覚めたのは十歳の時、石黒忠悳の漢学塾に入門し、そこで洋学も学んだことであった。石黒は後に陸軍の軍医総監になった西洋医で、森鴎外の上司に当たる。長岡藩は新潟港を持ち、もともと海外に目を開いていたので石黒忠悳のような人物が片田舎にもいたのである。

その頃、長岡藩は北越戊辰戦争により焼け野原になり石高も七万四千石（実高約十四万石）から二万四千石に減らされ、士族は困窮を極めていた。その中で、一八七〇年支藩三根山藩から百俵の米が贈られて来たが、藩の大参事小林虎三郎は、その米を藩士に分け与えず売却して学校設立の費用に宛てた。この故事は山本有三の戯曲「米百俵」で良く知られているが、その流れで一八七一年には長岡洋学校が設立され、井上も藤井もそこで学んだのである。

ここで、もう一度藤井宣正と井上円了の経歴を比較しておこう。

藤井宣正は一八五九年長岡市与板本願寺派西光寺に生まれ北越戊辰戦争で寺が焼かれたため長岡洋学校には三年遅れ十六歳で入学、一八八一年に本願寺派内地留学生となり慶応大学を経て東京帝大哲学科を一八九一年卒業、後の龍谷大学となる文学寮の教頭（学長）となっている。

一方、井上円了は一八五九年長岡市浦村大谷派慈光寺に生まれ十六歳で長岡洋学校に入学、一八七八年東本願寺の留学生として 東大予備門を経て、東京帝大哲学科を一八八五年卒業、後の東洋大学となる哲学館を創設して学長となっている。

両名の経歴は全く同一だといっても過言ではない。

迫り来るキリスト教の脅威の中、しかも激しい廃仏毀釈に見舞われていた浄土真宗も洋学を取り入れなければならない時代であった。その代表選手がともに長岡藩の領内から生まれたことは、偶然と言うレベルではなく、地政学的な位置付けで理解しなければなるまい。藤井宣正を理解する新たな視線だと思う。

[B] 井上瑞枝とその家族

宣正のウィキペディアには「瑞枝は日本英学校を首席で卒業「心の露」[3]を出版した才媛であり、実家は島崎藤村「破戒」の中で蓮華寺のモデルとなった」と簡潔に紹介されているが、本稿の主人公なので補足したい。

井上瑞枝（一八七〇生）は飯山市の本願寺派真宗寺第二十三代住職井上寂英（一八四二生）とよしえ（一八四一生）の

長女。十一歳の時に単身上京し島地黙雷(一八三八生)の庇護のもとに跡見学校の寄宿舎に入る。寂英が島地黙雷と知り合ったのは一八七三年築地本願寺別院の輪番(末寺から選ばれた本山執行委員)として勤務した際と思われる。

その頃は東京にまだ女学校もない時代、跡見学校は上流家庭の子女の集まる唯一の教育機関であったが、瑞枝は知名の学者、先輩を訪問して私宅教授を受けている。そのことを瑞枝は就職活動のために作成した履歴書に次のように記している。

一八八六年十月より麹町区飯田町明治女学校に入り英語を修め、宇田川準一等に就き物理学、生理学、植物学などを学ぶ。一八八七年九月より神田区猿楽町の日本英学館に入り一八八〇年二月、同館高等英文学全科卒業、この間、高橋五郎、三宅雪嶺、辰巳小次郎、雨森信成、松木政雄、マクレー、マンソン、フォールス等に就き英文学、教育学、倫理学、心理学、経済学などを学び、傍ら蒲生重章、根本通明、三島毅、豊島毅に就き漢学を修む[4](p.39)。

とにかく機会を見つけては貪欲に学び、それを活用していた様子が判る。まわりは華族や高級官僚・豪商の子女ばかりの中で、平民の瑞枝はキャリアウーマンを目指していた。瑞枝の書『乱れ雲』[5]に序を寄せた文学博士村上専精(一八五一生、帝大初代印度哲学教授)は「英学館在学中、百五十名(男子)のクラス中、山田孝道君(今の曹洞宗大学教頭)と、瑞枝女史との二人限り、年末試験最優秀のため、特別の進級を許された」とその才媛ぶりを述べている。なおウィキペディアの日本英学校は日本英学館の誤りである。

長女の瑞枝には弟で長男の弘円(一八七二生)と次女の鶴枝(一八八一生)がいる。弘円は文学寮で藤井宣正に学び、第一次大谷探検隊では大谷光瑞の秘書格で随行、インド班を担当している。その四女武子(一九一一生)は大谷光瑞の秘書となり、ミス上海となった美人である。

猪瀬直樹の『ふるさとを創った男』[4]は主として鶴枝の夫、小学唱歌「ふるさと」や「朧月夜」を作詞した高野辰之(一八七六生)を主人公とした「志を果たしていつの日にか帰らん」の物語であるか、武子に取材したことによって作品の幅が拡がっている。

例えば、猪瀬直樹は主人公高野辰之を登場させる前に、武子から得た藤井宣正の絵葉書についての情報を基に島崎藤村が『破戒』の習作として書いた「椰子の葉陰」について詳しく述べている。私の問題意識とも重なる部分があるのでこれは後述する。

武子の記憶は十三歳の時、関東大震災(一九二三年)のため飯山に戻ってきた瑞枝のことから始まるが、その時五十三歳になっていた瑞枝の印象を「ネットの黒い

ヴェールを被って、ずば抜けて上品でした。子供心に、こんな綺麗な人、いるのかしらって思いました」[4](p.45)と語っている。ミス上海は近代的な美人、瑞枝も鶴枝も写真を見ると瓜実顔で聡明さや意思の強さが顔に表れた美人だと思う。

井上寂英の妻よしえは十一歳の瑞枝を島地黙雷のもとに送り、次女鶴枝を学齢に達する前に英語習得のため地質学者のジョン・ミルンのもとに送っている。藤村の『破戒』に出て来る蓮華寺の奥様もかなりのやり手のようだ。瑞枝がよしえの資質を受け継いだのは間違いないであろう。

[C] 宣正と瑞枝の仲を取り持ったのは入江すみ子か

藤井宣正と井上瑞枝は一八九二年六月六日東京白蓮社会堂で日本初の仏前結婚式を挙げている。そのことに全く異論はないが、ウィキペディアでは両名の仲を取り持ったのが入江寿美子（後の伊藤博文夫人）だと書いてある。もちろん状況から見て極めて疑わしい。第一、入江すみ子を後の伊藤博文夫人としているのなど論外であり、正しくは伊藤博文の最初の妻である。

村上邦治氏も「紀行(9)」では「新潟から出てきて自宅に寄宿した藤井宣正と、井上弘円の姉で長野から出てきて黙雷宅で厄介になった瑞枝との結婚式で……黙雷は仲人を務めた」と入江すみ子説など一顧もしていない。

ところがもしかしたら入江すみ子の仲介説は正しいのではないかと気になり始めた。ここから入江すみ子との格闘がはじまる。

入江すみ子は、吉田松陰の松下村塾において、高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿と共に四天王と謳われた入江九一やその実弟野村靖（一八四二生、廃藩置県の成立に功があり、岩倉使節団にも参加、内務大臣、逓信大臣などを歴任）の妹である。一八六三年伊藤博文と結婚し一八六六年に離別、一八六八年に伊藤博文の仲人で再婚したという流れは、ちょっとインターネットで調べれば簡単に判る。問題は再婚相手が分からないことである。

多くは再婚相手を長州藩士としているが、中には山県有朋も候補だったとか神戸港の商人だとか諸説ある。相手が定まらないことには、入江すみ子のその後のことなど調べようがない。

その中で、最も信頼できそうな情報は、伊藤博文のウィキペディアのなかに、ほんの一行であるが、入江すみ子は「梅子が妊娠したことにより離縁され、のちに神戸税関員と再婚した」とある。

入江すみ子が再婚した一八六八年は、一月三日の王政復古宣言と同日に始まった戊辰戦争、続いて一月十五日には各国公使に王政復古が通告されるなど慌ただしい中、二月四日には備前藩と英・仏・米の水兵間の「神戸事件」、三月八日には土佐藩とフランス水兵間の「堺事件」と外

交問題が相次いで起こり、新政府は対策に苦慮していた。

その中で頭角を現したのが英語力と交渉力を合わせ持つ伊藤博文であった。その年七月には兵庫県知事に就任している。

その頃、神戸は最重要貿易港であり、それが伊藤博文の管轄下に入ったのである。「神戸税関員」とさらりと書いてあるが、おそらく伊藤博文の信頼する長州藩の人材であったに違いない。

そこで、現代に至るまでの歴代神戸税関長のリストを入手してみた。神戸税関の発足は一八七二年十月であるが、一八七四年一月から一八八〇年三月まで二代目の税関長を勤めた人物の名前を長岡義之と記している。ただし奇妙なことに出身とか前歴の欄が空白である。

名前さえ判れば、いくらでも情報が集まる。早速、獨逸学協会会員名簿（獨協学園百年史編纂室編）に長岡義之の名を見つけた。そこには大蔵省外国品調度掛長、権大書記官関税局検査官 大阪税関長、会計検査院検査官、法学博士 山口士族（麹町区元園町二丁目四）とある。やはり長岡義之は長州藩士であった。

その後も情報が続々集まる。列記してみよう。

① 一八八〇年山口市銭鋳司に建設された「大村公神道之碑」に寄付した人の名が六十八名記されている。有栖川熾仁親王、東伏見嘉彰親王、三条實美、毛利元徳、伊達宗城、伊藤博文、井上馨、山田顕義、山尾庸三、林友素、品川彌次郎、原田一道と続く中ほどに長岡義之の名を見る。大村益次郎系統のかなりの人物のようだ。

② 外交官の大物長岡春一が義之の息子だと判る。春一は一八七七年生で勲一等瑞宝章。母が入江すみ子であれば、三十歳の時の子。兄弟の記載がないところを見ると一人っ子らしい。

③ 「岩倉使節団」を広く研究している泉三郎の主宰する『欧米亜回覧の会』という会の会報に小野博正と言う方が書いた「岩倉使節団人物論の列伝からもれた随員たちexpydoc.com」というウェブがある。そこに長岡義之の名を見つける。大蔵理事官田中光顕に随行した山口出身で出生没年不詳。妻は分部光賓（第八代近江大溝藩主）の娘とある。しかし分部光賓は一八〇八年没、その継嗣分部光邦も一八一〇年没で年齢的に全く合わない。もし長岡が岩倉使節団（一八七一～七三年）の一員だったとすれば、副使の伊藤博文、入江すみ子の兄の野村靖、藤井宣正や井上瑞枝の師である島地黙雷と関係者が全て岩倉使節団の参加者となる。長岡義之が初代神戸税関長でなく二代目なのは、その間岩倉使節団に随行していたからであろう。

④ そうこうしている内に、二〇一五年の大河ドラマ『花燃ゆ』の資料「長州のひとびと」の項に、……（入江）九一は禁門の変で散りますが、すみには母への孝行を

日頃から頼んでいたといいます。……一八六三年、伊藤博文と結婚しますが、一八六六年に離婚。一八六八年に長州藩士の長岡義之と再婚します。一八九三年母を看取りますが、その後のすみについては知られていません……とあるのを見つけた。

⑤ そしてアジア歴史資料センターの資料で長岡義之の生年一八四〇年、没年一八八六年と確認する。

素人なので大分遠回りしたが、もう再婚相手が長岡義之なのはゆるがない。

それでは入江すみ子が再婚した後にどうなったのであろうか。藤井宣正と井上瑞枝の仲を取り持つ時に「長岡すみ子」ではなく「入江すみ子」と名乗ったとすれば、再び離婚して「入江」に戻ったのであろうか。

入江家は長男の九一が禁門の変で戦死、次男の靖は野村家へ養子に出ていたので後継ぎがいなかった。

その頃、神奈川県令となっていた野村靖は、次男の貫一を入江家の養子にし、入江すみ子を戻し、彼らの母と共に入江家を再興したのではなかろうか。前出の『花燃る』の資料にも「一八九三年母を看取る」とある。

その決定的な証拠になると思うのは、長岡義之の長男の名が「春一」、その長岡春一の長男が「美一」、入江家の養子となった野村靖の次男の名が「貫一」、そして入江九一も「九一」と名前に法則性があることである。

あるいは、長岡義之が亡くなった一八八六年に入江に復姓したとも考えられるだろう。しかしそれでは九歳の春一を置いて家を出たことになる。おそらく野村靖は、すみ子を入江家に戻したことで、その後の長岡家の面倒を見たはずである。靖は一八九一年に駐仏公使（当時は公使が最高位）を勤めたが、長岡春一も一九〇二年にフランス在勤でパリ大学に学び、一九三三年に駐仏大使になっている。

入江家を再興した入江すみ子はまだ幼い入江貫一に代わって維新の名家入江家の家長を務めていた。

一方、瑞枝は日本英学館を優秀な成績で卒業し、伊藤博文等が設立したばかりの華族女学校に勤務先が決まるかにみえた。しかしその頃、後に津田塾大学を設立する津田梅子が教授補として入ってきたので事情が変わった。瑞枝は、島地黙雷や跡見花蹊、藤井宣正に就職活動の支援を強く依頼するが、当時の日本は女子の就職に対して偏見が多く、門戸が閉ざされていた。結局、藤井宣正との結婚の道を選ぶ。

末寺が一万ヶ所以上もある本願寺派きっての秀才と才媛の結婚である。華族女学校の教師の道よりはるかに素晴らしい「永久就職」ではないか。

ところが瑞枝は「わたしは世間で兄等が想像なさるような平和な運命の寵児ではありません。いろいろ複雑な因縁により藤井に嫁したのです。何しろ仏教界でも公然

結婚の出来るのは真宗だけ、真宗中でも西本願寺派、東本願寺派と分かれ、わたしたちの属する西本願寺関係で、それぞれ種々の因習的な資格などを取り調べて互いに結婚しようとすると、ごくごく狭い範囲になるのですからね」[4] P.40 と述べている。瑞枝の真宗寺と宣正の光西寺の間に何か問題でもあったのだろうか。

そこに入江すみ子が登場したのであろう。津田梅子は伊藤博文の娘の家庭教師で華族女学校入りは博文の推薦であった。島地黙雷や跡見花蹊とも関係のある博文は、前妻の入江すみ子に後処理を依頼する。それは島地黙雷や跡見花蹊の意を受けて「就職なんかやめてさっさと宣正と結婚しなさい」と言うものであったと思う。

瑞枝にとって十一歳違う宣正は、兄のような先生のような存在であった。周りから見れば理想的な組合せであるが結びつくには何らかのきっかけが必要であった。その役割を無事に勤めたのが入江すみ子であった。

後年、瑞枝は弟の弘円の四女でミス上海になった武子に「武ちゃん、女はあまり勉強するとしあわせになれないものなの」[4] (p.35) と繰り返して言っていた。

さあ、やっと私の中で、入江すみ子が納まるべきところにおさまったが、その明確な証拠は何もない。

[D] 宣正の実家・光西寺は「勧学」や「傑僧」を生む

ここまでの記述では、藤井宣正の実家・光西寺は北越戊辰戦争で焼かれて貧乏寺になり二男坊の宣正は、その貧困の中から本願寺派内地留学生となり慶応大学を経て東京帝大哲学科に進んだ秀才のイメージである。そのことに間違いがあるわけではないが、宣正と瑞枝の仲を取り持ったのが入江すみ子と言う「有りそうもない」説がウィキペディアに出ていたのでその出典を大分探した。唯一、ほぼ同じ内容を伝えていたのが与板町の出身者を紹介するウェブ (PERSON 05 YOITA) である。

その時は、ウィキペディアの丸写しだろうとあまり気にしなかったが、入江すみ子の仲介説が「あり得る」となって、与板町にそのような伝承があったのではないかと調べていた。

宣正がその死後十七年、本願寺派の勧学となったことで、思い出したのは宣正の父、藤井宣界も勧学だったということである。ただしその時は、田舎の名高い学僧だと思っていた。しかし本願寺派の勧学は僧侶二千名に一人ほどで他宗派なら大僧正なみの階位だという。そして宣界が勧学に昇進したのが一八八三年七十二歳の時で、その当時は再々本山にも出仕していたと言う。ちなみにその当時島地黙雷は司教で勧学に登るのは一八九三年である。

さて、それでは宣界の後を継いだ長男藤井界雄、すなわち宣正の兄はどんな人物だったろうか。それがびっく

りするほどの傑僧で、若い頃出奔し一向宗（浄土真宗）が厳しく禁止されていた薩摩に入り鹿児島開教に携わり、本山の内命を受けて沖縄の内探をしている。

父の死後一八九四年には戊辰の兵火で失われた梵鐘を再鋳造するため「三万人余に募り金八百余、銅錫幾百斤」を得、島地黙雷らの宗教人のみならず、山縣有朋、西園寺公望ら二十余名から鐘銘の辞や書を得て刻している。

その後も日清・日露そして第一次大戦の戦没者を敵味方問わず慰霊するため「萬歳閣」という壮大な伽藍を築きその中心に与板大仏（十三メートルの立像）を置いた。一角の「愛楳居」には藤井宣正の霊を祀っている。愛楳は宣正の雅号で楳は梅である。

このようなことを知ると、入江すみ子の仲介説は与板発であったことも考えられる。瑞枝の実家の真宗寺は飯山の豊かな寺で、藤村の『破戒』の舞台なので注目していたが、実は与板の光西寺の方が真宗寺よりも格上だったようである。この部分は、長岡市の広報誌「よいた」に載った「界雄一代」[6]によっている。

［E］飯山取材は『破戒』と『椰子の葉陰』のどちらが先か

島崎藤村の「椰子の葉陰」が『破戒』の習作であり、藤村が詩から散文に向かう大きな役割を果たしたとするのは、いまや定説と言って良いだろう。共に飯山の真宗寺に舞台をとり、『破戒』の心理的な構成や描写も「椰子の葉陰」から多く引き継いでいると言う。

そうであれば、飯山における「椰子の葉陰」の取材が先で、その経過で飯山が『破戒』の舞台に選ばれたとするのが素直な考え方であろう。『破戒』のモチーフ面でのモデルとされる大江礒吉も猪子蓮太郎も飯山と特に関わりがあるわけではない。

ところが、定説では『破戒』の取材中に、藤井宣正からの絵葉書が真宗寺に沢山あることを知り、急に「椰子の葉陰」を先に書いたことになっている。

その解釈の背景には、島崎藤村が藤井宣正や井上瑞枝を知るはずがないと言う認識があるだろう。しかし、彼らの経歴を調べてみれば、藤村が瑞枝や宣正を知らなかったはずはない。そのことは経歴を述べる時に伏線として示しておいた。

島崎藤村は一八七二年生まれで瑞枝より二歳年下であるが、明治学院を卒業して一八九二年二十歳で明治女学校高等科の教師となっている。一方瑞枝は明治女学校を経て一八九〇年日本英学館を最優秀な成績で卒業、一八九一年には『心の露』[3]を発表、翌年藤井宣正と白蓮教会堂で仏前結婚式を挙げている。樋口一葉がまだ世に出る前であった。しかも明治女学校は麹町区下六番、島地黙雷宅や白蓮教会堂は麹町区中六番にあり隣接していた。同じ英語の世界で競った藤村が、瑞枝のことを知らないはずはない。

一方、第一次大谷探検隊のインドにおける活動情況はその後日本にどのように伝えられたであろうか。

大谷光瑞は父二十二世の光尊が一九〇三年一月十八日に亡くなると大急ぎで帰国するが、折からのエドワード七世印度皇帝戴冠式のため船便が取れず京都に帰着したのは三月十四日になった。意図した帰国ではなかったが、新聞は大谷探検隊の偉業を讃え、あたかも「凱旋帰朝」の様相であった。

ちょうどその頃、藤井宣正が印度中央部のナーグプル(Nagpul)から二月二十四日に出した「印度村落風景」の絵葉書が真宗寺や瑞枝のところに届いたはずである。ナーグプルはインド西海岸ムンバイと東海岸カルカッタのちょうど真ん中にある都市で椰子の名所である。

雑誌『太陽』一九九一年六月号(通算三六〇号)に載った宣正の絵葉書を示す。まさに「椰子の葉陰」の風景である。

ところがこの絵葉書について藤村はなぜか「椰子の葉陰」の中で何も触れていない。二月一日付の第九信と三月十一日付の第十信の間が空白なのである。小説の題目にもなっているのに二月二十四日付の絵葉書だけが欠落している。他の例からみれば敎行の記載で済むのに載せられていないのは奇妙なことである。

実は島崎藤村の研究者田中富次郎は、一九五二年の飯山の大火で真宗寺の旧い建物が焼失してしまった後に、焼け残った経堂の六角堂を調べたが「当時の絵葉書は散佚して現存しなかった」と報告しているのである[6](p.158~169)。そのため彼の研究では、宣正の「現地調査日記」(後に飯山市藤村文学研究会が『印度霊穴探見日記』[8]として出版)の記載と「椰子の葉陰」の内容を比較する方法をとっている。

ところが前出の『ふるさとを創った男』によると、猪瀬直樹が真宗寺を訪れた一九七六年には「六角堂の経典に交じって、椰子の木が写っている変色した古い絵葉書がしまいこまれていた」というのである[4](p.18)。

まさに藤村が何も触れなかった二月二十四日付絵葉書である。しかも「小説の第一信から第十三信までは、ほぼ現存する絵葉書に即している。実際に絵葉書と小説を

読み較べてみて、それは確認できた。第十四信から第十七信までは、まったくの創作である」[4] (p.30) と述べている。

それなら「大発見」であるが全く驚いた様子がない。猪瀬は田中富次郎の著書[7]も参考文献に挙げているが「散佚して現存しなかった」との記述を見落としたのであろうか。それとは全く逆になるが、猪瀬直樹が絵葉書群を再発見した一九七六年の十二年後に、飯山南高校の先生だった三井文彦が書いた『藤村と飯山』(発行真宗寺)では相変わらず「絵葉書のことだが……現在は一枚も見当らない」としている。どうなっているのであろうか。

宣正の絵葉書は彼の「現地調査日記」[8]によるとその宛先の多くが妻、兄、飯山を含んでいる。前出の絵葉書は良く見ると地名ナーグプルをローマ字で書いているので瑞枝あての可能性が高い。「散佚した」のは真宗寺あての分で、再発見されたのが瑞枝あての分とでもいうのであろうか。

それにしても二月二十四日付けの絵葉書「印度村落風景」のみ、藤村の「椰子の葉陰」から抜けているのは、何か意味があるはずである。また気になることが生じたが先に進む。

大谷光瑞に随行していた井上弘円が帰国するのは宣正の「日記」によると二〇〇三年四月末頃である。また宣正の最後となった五月十五日付「孟買(ムンバイ)通信」[9]には「印取せる古銘文は……近日此の地より錫蘭(セイロン)を経て六月の初に帰朝すべき姉崎正治氏に託せり」とある。

八月十八日に戻ってきた藤井宣正の遺骨を弘円が出迎えている。宣正の「現地調査日記」などの遺品は弘円により真宗寺に持ち帰られた。その時は瑞枝も同行していたかも知れない。いずれにしても一連のニュースは新聞に報道されている。

飯山は、浄土真宗本願寺派の地盤である。これらの絵葉書のことは檀家、本願寺派の寺院でも評判になったであろう。「椰子の実」を『落梅集』に発表して成功を収めた藤村が知れば興味を示すはずである。

そこに登場するのが、新設されたばかりの飯山中学校に図画教師として島根県からやってきた森本香谷である。就職を紹介したのは藤村と一緒に小諸義塾で図画教師をしている丸山晩霞である。森本香谷は、とりあえず真宗寺に宿を取った。

『破戒』の冒頭は「蓮華寺は下宿をかねた……」で始まる。『破戒』の主人公瀬川丑松のモデルとなる清水謹治も五年前から真宗寺に下宿していた。そこに森本香谷を訪ねて丸山晩霞がやってくる。

水彩風景画家である森本香谷や丸山晩霞は、「椰子の

葉陰」などの絵葉書に関心を持ったであろう。そのまま模写すれば立派な作品になりそうなのである。事実、グーグルの画像検索を使ってこの「椰子の葉陰」に似た画像を探してみたところびっくりしてしまった。百二十年も前の絵葉書がインターネット上に存在していたのである。

諸説あるが、通説によれば、藤村が飯山を訪れたのは二回である。いずれも「千曲川のスケッチ」[X]の記載を精緻に追いかけた研究結果によるが、結論から言うと一回目は豊穣な稲田を見るような秋で丸山晩霞が同行していた。一九〇三年の秋のことであろう。おそらくこの結論と繋がる記載が「千曲川のスケッチ」に記されている。

（千曲川・山に住む人々の一）

飯山の方では私は何となく高い心を持った一人の老僧に逢ってみた。連れ添う老婦人もなかなかのエラ者だ。……君は印度に於ける仏蹟探険の事実を聞いたことがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は斯の老僧の子息さんで、娘の婿にあたる学士も矢張一行に加はった人だ。学士は当時英国に留学中であったが、病弱な体軀を携げて一行に加はり、印度内地及び錫蘭に於ける阿育王の遺蹟などを探り、更に英国の方へ引返して行く途中で客死した。この学士の記念の絵葉書が沢山飯山の寺に遺って居たが、熱帯地方の旅の苦しみを書き付けてあったのなぞは殊に、私の心を引いた。老僧の子息さんは兵役に服して居るとかで、その人には私は遺って見なかった。

通説の二回目は一九〇四年一月十三日から十四日と日時がはっきりしている。この時の様子を「千曲川のスケッチ」などからまとめると次のようになる。

（千曲川・千曲川に沿うて）

軽井沢の方角から雪の高原を越して次第に小諸へ降りて来た汽車、それに私が乗ったのは一月の十三日だ。……この旅は私独りでなく小諸から二人の連があった。いずれも私の家に近いところの娘達で、I、Kという連中だ。この二人は小諸の小学を卒えて、師範校の講習を受ける為に飯山まで行くという。……Naiveな、可憐な、見ていても噴飯したくなるような連中だ。御蔭で私も紛れて行った。Iの方は私の家の大屋さんの娘だ。……豊野で汽車を下りた。……私が（前に）一度その坂の上に立った時は秋で、豊饒な稲田は黄色い海を見るようだった。

（千曲川・山の上）

種々の土地の話を聞き、同行した娘達を残して置いて翌朝私は飯山を発った。……一月十四日のことで村々では「ものづくり」というものを祝った。……豊野から復た汽車で、山の上の方へ戻って行った時は次

第に寒さの加わることを感じた。

（田中富次郎論文[6]）

三村きの氏（K）の記憶では飯山行きの藤村の服装は……馬子のような風体であったが、寺へは二人のお供だと言へ島崎だとは言うなと固く口止めされていた。…もうひとりの白樹山いそじ（I）は「清水先生は小学校の先生でしたから、私共を可愛がられまして、お二階のお部屋へはよく伺ひました。破戒を拝見いたしました時……破戒の主人公丑松さんは、清水先生をお書きになられましたことすぐわかりました」と言っている。

（高野辰之の『破戒』後日譚・猪瀬[4]（p.162））

確かに藤村という人がこの寺に来たことが一、二度あるな……老奥様に訊ねたところ、確かに偽名を使って寺に来ている。……馬子のいでたちだったが手足を見ればすぐわかる。同行の女学生に問い質してみると……藤村という有名な詩人だという。そこで手厚くもてなした。

通説二回目の真宗寺訪問記事を全て並べてみても、その時藤村が住職の井上寂英に会った形跡はない。「種々の土地の話を聞いた」相手は清水謹治であろう。謹治は長野尋常師範学校を経て飯山の小学校訓導になって真宗寺に下宿していたが、破戒の主人公の瀬川丑松も長野尋常師範学校、飯山の小学校訓導と全く同じコースを辿っている。藤村にとって通説二回目の真宗寺訪問が清水謹治への取材にあったことは疑いない。しかもその日は汽車で小諸から豊野まで行き、豊野から飯山までの二十キロメートルは千曲川を舟で下っているので五、六時間かかり、到着は夕方になっていたであろう。翌日は朝立ちしている。「椰子の葉陰」の取材時間など取れなかったはずである。

また、老奥様の記憶では確かに偽名を使って一、二度来ているとある。しかも、固く口止めしたというのは特別な理由があるはずだ。私案を示そう。

その頃、藤村は『新小説』一月号に、妻の婚約者であった男とのことを「水彩画家」という短編に発表し、題名からモデルと目された丸山晩霞が激怒していた[7]（p.125～137）。

間もなく『明星』に発表される「椰子の葉陰」も真宗寺の了解を全く得ていない。藤村は『破戒』の執筆を控えて、問題を避けたかった。

それらの問題に加え、一月十三日から十四日に取材して、原稿を書き、出稿、校閲、校正、印刷を経て『明星』三月号（三月一日発行）に載せるまで一ヶ月半というのは特別な便宜を図ってもらったとしても簡単ではない。

藤村が『新小説』に載せた「津軽海峡」の場合を調べてみると取材は二〇〇四年七月末、八月十八日に出稿して

十月号に載せるつもりであったが、実際には十二月号になってしまっている。事情は分からないが取材から四ヶ月もかかっているのである[7] (p.172)。

そのような検討をしている最中、「箱店屋横丁大家の店番日記」という超長期ブログを見つけた。その中に「#破戒」と名付けた連載が今年初から本格化して既に二四八件あり、「藤村が飯山を訪問した時期と回数」を取り上げたブログだけでも四十件もある。

このブログの優れている点は、通説が主に「千曲川のスケッチ」の記載に依存して、一回目（秋、豊饒な稲田の頃）と二回目（一月十三日～十四日）しか認定していないのに対して、『破戒』の内容から、天長節（十一月三日）のテニス試合と、真宗寺の報恩講（十一月二十八日）の記述も、藤村が実際に見たことが元になっていると判断していることである。

すなわち、一回目（秋、豊饒な稲田の頃）、二回目（天長節頃）、三回目（報恩講の頃）、四回目（一月十三日～十四日）との新説を出し、「椰子の葉蔭」の原稿を書き上げたのは、二〇〇三年十一月末から十二月初旬だったとしている。それなら出稿から三ヶ月、取材から四ヶ月となり「津軽海峡」とほぼ同じである。

すこし冗長になったが数多くの理由を挙げて一月十三日～十四日の取材では『明星』の三月一日発行に間に合わないと主張してきた。しかしそれらには決定的な証拠が欠けていた。

ところが、やっと決定的な証拠が見つかったのである。

決定的な証拠（その一）姉崎正治への取材

それは猪瀬直樹が言うように「小説の第一信から第十三信までは、ほぼ現存する絵葉書に即している」が、感動を呼ぶ第十四信から第十七信は完全に藤村の創作で、その部分に相当する宣正の絵葉書がないのは当然である。宣正は第十四信の五月四日付で「いよいよ昨日にて印度旅行を終り申し候。明朝出発の因幡丸、われを乗せて此港を離るべく候」と英国に向かってしまうのである。

もちろん創作であれば、藤村の得意な分野であり、いくらでも書けたであろう。しかし注意深く読むと誰かに取材しなければ、藤村ひとりでは書けない項目がいくつもある。例えば

① コロンボの仏教大学「ウキデフダヤ」

② 奇異なる牛の牽く車「ゼビュウ」

③ 「浩浩鯨波，巨壑起滔天之浪。獨歩鐵門之外，亘萬嶺而投身　孤漂銅柱之前，跨千江而遣命」……『大唐西域求法高僧傳』の一部。

などである。

これらを藤村に伝え得る人物は、宣正が最後にコロン

ボで古銘文等の持ち帰りを託した姉崎正治しかいない。

姉崎正治(一八七三生)は東京帝大哲学科を一八九六年卒業、『印度宗教史考』を出版、一九〇〇年からドイツ・イギリスに留学し、印度・セイロンを経て一九〇三年帰国、翌年東京帝大教授となる。藤井宣正の印度での最終時期二ヶ月間ほどは姉崎正治としばしば一緒に行動していた。

さて、それでは藤村は本当に姉崎正治に取材したのであろうか。

実は姉崎正治は、文人としても優れた才能を持ち、帝大在学中には高山樗牛らと『帝国文学』を創刊、石川啄木とも交流があり、後になるが自らの主宰する雑誌『時代思潮』に啄木の詩を載せている。年齢は藤村の一歳下である。ベルリン大学留学中にリヒャルト・ワーグナーの楽劇に魅せられ、当時の総合雑誌『太陽』一九〇二年三～四月号の「高山(樗牛)君に贈る」でワグナーへの心酔ぶりを披露したことが明治末期の知識人たちの間にワーグナー・ブームを巻き起こしたという。ちなみに一八九五年『太陽』の第一巻には藤村も姉崎正治も稿を寄せている。

このような状況からみて、おそらく姉崎正治と藤村は直接的ではなくとも相互に知っていたのは間違いない。

更に決定的な証拠は、『明星』の「椰子の葉陰」の文中に何のコメントもなく突然「大音楽家ワグネル」の似顔絵が中央に挿入されていることである。後の全集等では削除されているので、編集者もその挿絵の意味を理解出来なかったのであろう。

事情が分かって見れば、藤村が何らかのルートで姉崎正治に取材したことを暗示しているのは疑いない。

もう一つの傍証を示そう。姉崎正治は一九〇三年六月に帰国するが、その年の十一月七日帝国文学会で講演した「ワグネルの戯曲に於る恋」の要旨を『明星』十二月号に載せ、更にその翌月の『明星』一月号に「ペクリンが浪の音づれ」を載せるのである。姉崎正治は作品のほとんどを自ら関与する『太陽』や『帝国文学』に載せていて『明星』に載せたのはこの二件のみである。

『明星』三月号には「椰子の葉陰」が載るが、いわば

『明星』3月号(3月1日発行)の「椰子の葉陰」の原稿中央部に何のコメントもなく、唐突に挿入されたワグナーの似顔絵。

藤村にとって『明星』はホームグランドである。時期から見て藤村が姉崎正治に取材した事に関連して紹介したのは間違いないであろう。

ここでもう一つ重要なことを紹介しておきたい。

藤井瑞枝と高山樗牛・姉崎正治は既知の仲であった。それは一九〇一年瑞枝が小田原に住んでいた頃、樗牛の弟、斎藤信策（野の人）が小山東助（後に東京毎日新聞主筆、衆議院議員）と一緒に訪ねて来たことがあった。ふたり共、島地雷夢の二高・帝大の友人であるがその時瑞枝は、樗牛の弟とは初対面で、容貌・風姿・言語・動作が樗牛とは少しも似ていなかったと述べている。その後、樗牛の弟は瑞枝のことを雷夢同様に「姉さん」と呼び、「駄々をこねたり理屈をいったり夢を語ったり遊んだり困らせ」ている。斉藤の雅号を「野の人」と名付けたのも瑞枝である。雷夢は明治仏教界の改革者島地黙雷の三男、法灯を継ぐ期待の秀才であったが二高時代にキリスト教に入信してしまった。同時に洗礼を受けたのが吉野作造と内ケ崎作三郎である。

筑摩書房の『明治文学全集40』は高山樗牛・斉藤野の人・姉崎正治・登張竹風を一緒に収録している。いわば、『高山樗牛全集』はこの四名で成り立ち、樗牛と共に雑誌『太陽』『帝国文学』で論陣を張った「野の人」は、兄樗牛の死に臨み、姉崎正治に送った書簡に「予は君が最愛の友の一人なる高山樗牛の弟也。予が命よりも愛したる彼は今逝きたり」と記している。

高山樗牛も姉崎正治も瑞枝と同年配であり藤井宣正の帝大哲学科の後輩である。どのようなルートで知り合ったか判らないが、瑞枝はそんな明治に生きていた。

なお、瑞枝には「逝ける野の人」という長文の弔辞（一九〇九年八月十七日清水潟にて）がある。

余談ながら、藤村が「椰子の葉陰」の十四信以降、創作で書いた部分に、宣正の最後を看取る留学僧が現れる。藤村はこの留学僧が初出することを「いまだ父上に書き送らざりし」と「言い訳がましく」書きながら、「見るからに頼母しき青年」と紹介している。藤村が姉崎正治をイメージして書いたものと思う。

かくして「椰子の葉陰」の取材は、通説の第二回目（一月十三日から十四日）ではなく、水彩画家丸山晩霞が同行した時（豊饒な稲田）を初回として、天長節（十一月三日）頃と報恩講（十一月二十八日）にも追加取材していたとの「箱店屋横丁大家の店番日記」の説を追認したい。

決定的な証拠（その二）清水謹治への「返事謝書」

ここまで書き上げたところで、国会図書館に手配していた藤井宣正の日記『印度霊穴探見日記』[7]のコピーをやっと入手した。主要な内容は田中富次郎論文[6]で承知

していたのであまり急いでいなかったが、精読してみて驚いた。

宣正が印度「第二旅行」を終えた二〇〇三年二月二十日に友人等十数名宛てに印度から「返事謝書」を出しているが、その中に清水謹治の名前を見つけたのである。

『破戒』の主人公瀬川丑松の人物モデル清水謹治は、長野師範学校を卒業し、飯山の下水内高等小学校の訓導となった一八九八年から再び真宗寺に下宿している。

その頃、藤井宣正は西本願寺内局との対立で文学寮教頭を追われ浦和中学校の校長を務めていた。宣正は瑞枝を伴いしばしば真宗寺に里帰りしていたに違いない。

清水謹治にとって帝大卒の中学校校長と親しく話すのは貴重な機会であった。その宣正から真宗寺に絵葉書が届きはじめる。謹治は早速印度の宣正に手紙を送った。

その清水謹治は長野師範学校で同級のアララギ派の島木赤彦とともに藤村の熱烈なファンであった。後に飯山小学校校長、飯山町長を勤める。

宣正の二月二十日付「返事謝書」は、船便の関係で二月二十四日にナーグプルから出した「椰子の葉陰」の絵葉書と同時に真宗寺についたであろう。それは清水謹治にとって「椰子の実」の作者島崎藤村にぜひ知らせたいニュースであった。

ちょうどその頃、飯山中学校に図画教師として赴任してきた森本香谷も真宗寺に下宿していた。ふたりは、島崎藤村の「椰子の実」のことや「椰子の葉陰」の絵葉書のことについて話したに違いない。そしてその話は藤村と同じく小諸義塾の図工教師をしている丸山晩霞に伝わる。

繰り返すが、清水謹治は藤村にとって『破戒』の貴重な取材源であり、後に主人公瀬川丑松のモデルになる人物である。その清水謹治が、絵葉書「椰子の葉陰」をもって藤村を待ち構えていたのである。

だから判る。藤村にとっては、清水謹治から「椰子の葉陰」の絵葉書を知り、まず「椰子の葉陰」を書き、その縁で飯山を舞台に彼をモデルとして『破戒』を書き始めたのである。いわば、藤井宣正からの絵葉書「椰子の葉陰」が『破戒』の舞台を飯山に導いたのである。

そうであれば、藤村が詩作から小説に向かって苦闘していた時に、藤井宣正と瑞枝が大きな役割を果たしたことになる。藤村の研究者にとっては大きなニュースといえるであろう。

それにしても、猪瀬直樹が流石だと思うのは、藤村の成長過程に、有名な新体詩「椰子の実」から「椰子の葉陰」に至る一本の道筋があると指摘していたことである。具体的な意味は不明であるが、誰でも想うことを藤村研究者はあまり重視していなかったようだ。むしろ「箱店屋横丁大家」や筆者のような素人の直観の方が正しい場

合もあるのである。

[F] 鶴枝と高野辰之　志を果たして帰る

小学唱歌「ふるさと」や「朧月夜」が高野辰之の作詞であることは、今ならすぐ判る。しかし、その唱歌を学んだ時分は誰も知らなかった。高野辰之の妻井上鶴枝の姪でミス上海となった井上武子でさえ、小学校で習った「ふるさと」が叔父高野辰之の作詞だなどとは全く知らなかった。飯山の人達も同様であった。

しかし猪瀬直樹の『唱歌誕生―ふるさとを創った男―』を読むと感銘を受けるはずである。まさに唱歌「故郷」に出て来る「志を果たしていつの日にか帰らん」の物語なのである。

鶴枝十七歳、高野辰之二十二歳の時ふたりは結婚する。高野辰之は苦学しながら尋常師範学校すなわち小学校の先生になるコースを進んでいた。結婚するとき、鶴枝の母よしえは「将来、人力車に乗って山門から入ってくる男になるなら……」との条件をつけた。

しかし尋常師範学校は当時のエリートコースと全く異なっていて、どんなに努力しても限界があった。それが辰之四十九歳一九二五年に東京帝大から文学博士の称号を受けて人力車に乗って故郷に錦を飾ったのである。

藤村は『水彩画家』のモデル問題で丸山晩霞を激怒させたが、『破戒』でも真宗寺（蓮華寺）の住職のことを「養女に手を出すような女狂い」と描いたので飯山の人たちは小説を信じてしまい、真宗寺の一族はえらく迷惑して藤村を怨んでいた。

そのため娘婿の高野辰之が「『破戒』後日談」を雑誌『趣味』の一九〇九年四月号に変名で載せる。しかし藤村は寺院や住職をモデルにして描いただけでこれは「小説」だと反論する。藤村は日本全国の読者を対象としていたが、飯山はローカルな地域、「借景」とした真宗寺とそこに登場する人物を区別しなかった。

どうやら藤村の小説には当初から「モデル問題」がつきまとっている。その極まりが、実姪の島崎こま子と一線を越えたことを『新生』に赤裸々に描いたことである。

なお、高野辰之は清水謹治と同い年の従兄弟で二人はとても仲が良かったという。共に長野尋常師範学校の出身であるが学年は辰之が一年上である。藤村が「椰子の葉陰」を書く頃、辰之は既に結婚して上京していたので、直接の関係はないが、同窓の島木赤彦、清水謹治、高野辰之がみな文学を志していた。そう言う時代であった。

おわりに

冒頭に書いたが村上邦治氏の連載「安芸門徒シルクロード紀行」に登場する藤井宣正の名を見て訳もなく懐かしさがこみ上げてきて、その理由を知りたくなった。

そのため、藤井宣正を調べる内に、宣正や瑞枝の魅力にも触れ完全に嵌まってしまった。ひとつ疑問を解くと、また新たな疑問が生ずる。そして当初は思ってもみなかった長い探索の旅となってしまった。

コロナで外出も思うようにならない中、結構楽しい旅であったが、この辺で締めたい。

最後になったが、藤井宣正の「孟買通信」[8]のコピーにサンチーの大塔の写真がある。直径三十六メートル、全高十七メートルほどの紀元前後の仏塔で多くの仏教遺跡が破壊された中、丘全体が樹木で蔽われていたため、奇跡のように破壊を免れた。

もう四十年ほど前、世界各地の古代建造物の写真や図面とにらめっこしながら、古代の尺度研究に没頭していた。その中でも仏教のルーツ、印度サンチー大塔は整然とした計画で造られていて大変魅力的であった。もしかして、その時に藤井宣正に出会っていたのかも知れない。

参考文献

[1] 河口慧海『西蔵旅行記』時事新報と大阪毎日新聞連載、一九〇四　今は『青空文庫』で読める。

[2] 村上護『島地黙雷伝―剣を帯した異端の聖―』ミネルバ書房、二〇一一。

[3] 井上瑞枝『心の露』目黒書店、一八九一。

[4] 猪瀬直樹『唱歌誕生―ふるさとを創った男―』小学館、二〇〇二。「あとがき」によると初出は『月間 weeks』で単行本となったのは一九九〇年。

[5] 藤井瑞枝『乱れ雲』丙午出版社、一九一三。

[6] 石黒秀一「界雄一代」『長岡市の広報誌よいた』三一〇～三三三号、一九九二。

[7] 田中富次郎『島崎藤村Ⅱ『破戒』・その前後』桜楓社、一九七七。原論文「「島崎藤村に関する覚書」藤井宣正について…『破戒』の発想(1)…」『信州大学教育学部紀要』15、一九六五。

[8] 三井文彦校注『藤井宣正・印度霊穴探見日記』飯山市藤村文学研究会、一九七七。三井文彦『藤村と飯山』発行所真宗寺、一九八八。

[9] 藤井宣正「孟買通信」上原芳太郎編『新西域記上巻』有光社、一九三七年。

[X] 島崎藤村『千曲川のスケッチ』左久良書房、一九一二　今は『青空文庫』で読める。

なお、ウェブやブログ関係、特に「箱店屋横丁大家の店番日記」の「#破戒」と名付けた連載から多くを学んだが、「藤村が飯山を訪問した時期と回数」を取り上げたブログだけでも四十件もあり、詳細を示すのが困難である。ブログにログインすれば辿れるので省略した。